

平成30年度子ども・子育て支援推進調査研究事業

地域子育て支援拠点の 寄り添い型支援が親の成長を促すプロセス分析と 支援者の役割に関する調査研究 報告レポート

全国に7,000カ所を超えて整備された地域子育て支援拠点では、
今日も、小さな命を育む親たちに寄り添い、親子の成長を促す支援が行われています。

子育ての不安感や負担感、孤立感などがますます高まる中で、
地域子育て支援拠点事業は、地域子ども・子育て支援事業の一つに位置づけられ、
子育て家庭に最も身近な支援の中核的機能を果たす取組として重要性が増し、
役割の充実に大きな期待がかけられています。

地域子育て支援拠点の特徴ともいわれる「寄り添い型支援」が、
親の不安感や負担感、孤立感をどのように軽減しているのか。
拠点の寄り添い型支援が子育て中の親が持っている力を、
どのように育み「親としての成長」を促しているのか。
この2つを明らかにし、地域子育て支援拠点事業の質の向上に役立てることを目標に、
全国504カ所の地域子育て支援拠点の支援者と利用者にご協力いただき、
本調査研究を実施いたしました。
ご協力いただきましたすべての皆様に感謝申し上げますとともに、
調査研究によって明らかとなった内容を、報告レポートとしてここにご報告いたします。

なお詳細な調査結果については、
子育てひろば全国連絡協議会のホームページ <http://kosodatehiroba.com> にて公開しております。

NPO 法人子育てひろば全国連絡協議会



全国の地域子育て支援拠点（504カ所）の協力により実施した横断研究（質問紙調査と聞き取り調査）および短期縦断研究（プレ・ポスト型質問紙調査と聞き取り調査）によって、拠点における「寄り添い型支援」として支援者が実践している役割と、それがどのように利用者の「親としての成長」を促しているのかを探求した結果、次のことが明らかになりました。

地域子育て支援拠点における「**寄り添い型支援**」は、支援者を対象とした質問紙調査の分析から、次の4つの側面で構成されていることが示されました。

<質問紙調査から>

1. 対人援助技術の活用
2. 受容的・共感的姿勢
3. 知る・学ぶ機会の提供
4. 個別ケースの共有と対応

なかでも「1. 対人援助技術の活用」と「2. 受容的・共感的姿勢」は、寄り添い型支援を特徴づける重要な側面で、前者にはソーシャルワークで重視されている姿勢や観点が数多く含まれ、後者はピア及び支援者との間の受容の連鎖を作り出す役割を担っています。さらに分析を進めることで、4つの支援が全体的に不十分な状態から、まず個別ケースの共有・対応が可能となり、次に受容的・共感的姿勢を獲得し、最終的に4つの支援が総体として展開されていく、支援者が「寄り添い型支援」を習熟していく過程も浮かび上がりました。

聞き取り調査からは、「寄り添い型支援」が以下の4つの支援に分類され、質問紙調査では捉えきれなかった「地域子育て支援拠点という場の力」が見出されました。

<聞き取り調査から>

1. 拠点という場の力を使って行った支援
2. 支援者と利用者の相互作用を活用した支援
3. 利用者相互の関係性を用いて行う支援
4. その他の支援（寄り添い型支援を支える活動）

以上から地域子育て支援拠点における「寄り添い型支援」の定義を質問紙調査と聞き取り調査の双方の結果が補完し合いながら明示することができました。

地域子育て支援拠点における 「寄り添い型支援」

地域子育て支援拠点という場を使いながら、ピア及び支援者との相互作用を活用し、受容の連鎖をつくることを通して、親と支援者が、共に相互にエンパワメントし合う活動。

地域子育て支援拠点における 「親としての成長」

親が、日々の子育てや子育てで生じた葛藤や困難に向き合う中で、自らのこれまでの経験を活かしつつ、力添えを受け入れたり、必要に応じて他者に頼るなど、子育てに関する自己決定の経験を通して、わが子への感受性や応答性を高めること。また、こうした経験を通して、わが子以外の子どもの存在に気づき、共に養育に関わろうと認識し、行動しようとするプロセスである。

次に、地域子育て支援拠点における「親としての成長」について、利用者への質問紙調査から、
＜質問紙調査から＞

- ・エンパワメント
- ・交流の広がり・深まり
- ・自己有用・有能感

の3つの側面が大きく示され、聞き取り調査からは、13のカテゴリーがとして捉えられました。

＜聞き取り調査から＞

1. 安全基地と安全な避難場所の獲得
2. 親の愛着対象の認識と獲得
3. セルフケアの意識
4. 養育力の獲得
5. 他者に頼る力
6. 子どもの育ちを分かち合える仲間の獲得
7. 経験を活かした自己実現への意識の高まり
8. 肯定的な養育イメージの獲得
9. 親世代との関係の見直し
10. 将来展望の獲得
11. 配偶者との関係の見直し
12. 職業観の獲得
13. 他者への貢献意識の獲得

質問紙調査と聞き取り調査からは、親の成長を仮説的に定義した内容を含みながら、地域子育て支援拠点が親に与える成長は、親役割だけにとどまらない、人間的成長までをももたらすことが示されました。

また、プレ/ポスト調査からは、利用者が「寄り添い型支援」を受けていると意識しているほど、自らの親としての成長を実感している可能性も導き出されました。

地域子育て支援拠点において「利用者が親として自らを変容させていく過程を見守り支える」という特性を「寄り添い型支援」として高め、子育て中の親が本来持っている強み（力）を育み、「親としての成長」を促すための枠組みが、本調査研究によって明らかになりました。

今後はこれらの結果を、地域子育て支援の実践の場と共有しながら、支援の質の向上に活用していく具体的な方策を検討し、開発、実践することが期待されます。

本調査研究にご協力いただきましたすべての皆様に、感謝とお礼を申し上げます。

地域子育て支援拠点の支援者259人と利用者1,322人の質問紙調査結果から因子分析を行い、次のことが明らかになりました。

地域子育て支援拠点の「寄り添い型支援」は、

- 対人援助技術の活用
- 受容的・共感的姿勢
- 知る・学ぶ機会の提供
- 個別ケースの共有・対応

以上4つの因子で構成されている。

地域子育て支援拠点における「親としての成長」は、
エンパワメント

交流の広がり・深まり
自己有用・有能感

を利用する親にもたらす。

「寄り添い型支援」と「親としての成長」との関連を分析したところ、

寄り添い型支援を実感している利用者（親）は、親としての成長における

「エンパワメント」「交流の広がり・深まり」

「自己有用・有能感」

を実感していた。

地域子育て支援拠点を利用する保護者の

寄り添い型支援 とは…

地域子育て支援拠点の支援者が行っている寄り添い型支援は、因子分析の結果、4つの側面（因子）で構成されていることがわかりました。

第1因子の「対人援助技術の活用」に含まれる内容は幅広く、ソーシャルワークで重視されている姿勢や観点も多く、「寄り添い型支援」の定義の「ピア及び支援者との相互作用の活用」や「親と支援者がともに相互にエンパワメントし合う」に該当しています。また第2因子の「受容的・共感的姿勢」には、定義の「受容の連鎖」に該当する内容が含まれています。

要因複合度という指標から、支援者の「寄り添い型支援」の技術の獲得は、

4つの支援全体が未熟な状態から始まり、個別ケースの共有・対応ができるようになり、受容的・共感的な姿勢で支援できるようになり、最終的に「寄り添い型支援」4つの支援がすべて展開できるようになる、という過程も見えてきました。

地域子育て支援拠点を利用する保護者の

親としての成長 とは…

地域子育て支援拠点の利用者である親自身の変化、

つまり、親としての成長は、

因子分析の結果、大きく3つの側面（因子）に分類できました。

第1因子の「エンパワメント」には多様な要素が含まれていますが、自分なりの育児に向かう積極的な姿勢や他の保護者とともに育児に関わろうとする姿勢で、「親としての成長」の定義の「力添えを受け入れる・必要に応じて他者を頼る」「自己決定の経験」「わが子への感受性や共感性を高める」「わが子以外の親とともに養育に関わろうとする認識・行動」「力添えを受け入れる・必要に応じて他者に頼る」「自己決定の経験」にあたります。第2因子は、定義のうち「わが子以外の子どもの存在に気づく」「他の親とともに養育に関わろうとする認識・行動」が、第3因子は「自らのこれまでの経験を活かす」「自己決定の経験」「共に養育に関わろうとする認識・行動」に相当しています。

対人援助技術の活用 第1因子

「利用者との対等な関係」「利用者同士の支え合いや協力の促進」
「利用者の自信や他者への共感性を高める働きかけ」
「利用者自身の経験を活かす支援」
「利用者の自己決定を尊重した支援」「子どもの最善の利益の尊重」
「子どもの他者信頼への配慮」「支援者自身の成長につながる支援活動」

受容的・共感的姿勢 第2因子

「受容と共感的態度」「利用者のお家庭における子育ての実態の理解」
「日頃からいつでも相談を受け入れる態度」
「利用者の孤立防止・不安感の軽減の重視」
「子どもの理解と親と共にその成長を見守る姿勢」

知る・学ぶ機会の提供 第3因子

「利用者を対象とした情報の提供や講習会の開催」
「地域連携の推進」「利用者同士の語り合い促進」

個別ケースの共有と対応 第4因子

「ケース記録」「ケース会議の重視」

エンパワメント 第1因子

「子育てを助けてくれる存在の認識」
「育児に関して自分なりの解決法や価値観がある」
「わが子への成長・発達への理解や関心・わが子への愛情」
「子育てでつらいのは自分だけではない」
「自分も他者も共に子育てを頑張っている」

交流の広がり・深まり 第2因子

「自身が育児仲間と知り合えた」
「育児仲間と日常的に会話するようになった」
「子どもに友人ができた」
「他者の子どもに働きかけるようになった」
「他の親子の力になりたいと思うようになった」

自己有用・有能感 第3因子

「自分の情報・経験は他者の役に立つ」
「面倒なことでも行おうと思う」
「自分の本当の気持ちを話せる」

地域子育て支援拠点の

支援者20人と利用者20人の聞き取り調査結果から
文書セグメントを抽出、分類する分析作業を行い、
次のことが明らかになりました。

地域子育て支援拠点の「寄り添い型支援」は、

- 拠点という場の力を使って行った支援
- 支援者と利用者との相互作用を活用する支援
- 利用者相互の関係性を用いて行う支援
- その他の支援（寄り添い型支援を支える活動）

が総合的に提供される支援である。

拠点を利用する親は、

安全基地と安全な避難場所として拠点を思えることから、

養育力を獲得し、

将来展望を描き、

他者や地域への貢献へと意識を広げていく。

一連のプロセスが

地域子育て支援拠点における

「親としての成長」である。

支援者への聞き取り調査から

地域子育て支援拠点における「寄り添い型支援」とは、「地域子育て支援拠点という場を使いながら、ピア及び支援者との相互作用を活用し、受容の連鎖をつくることを通して、親と支援者がともに相互にエンパワメントしあう活動」と定義することができます。

その具体的な支援を大きく分類すると、

拠点という場の力を使って行った支援

支援者と利用者との相互作用を活用する支援

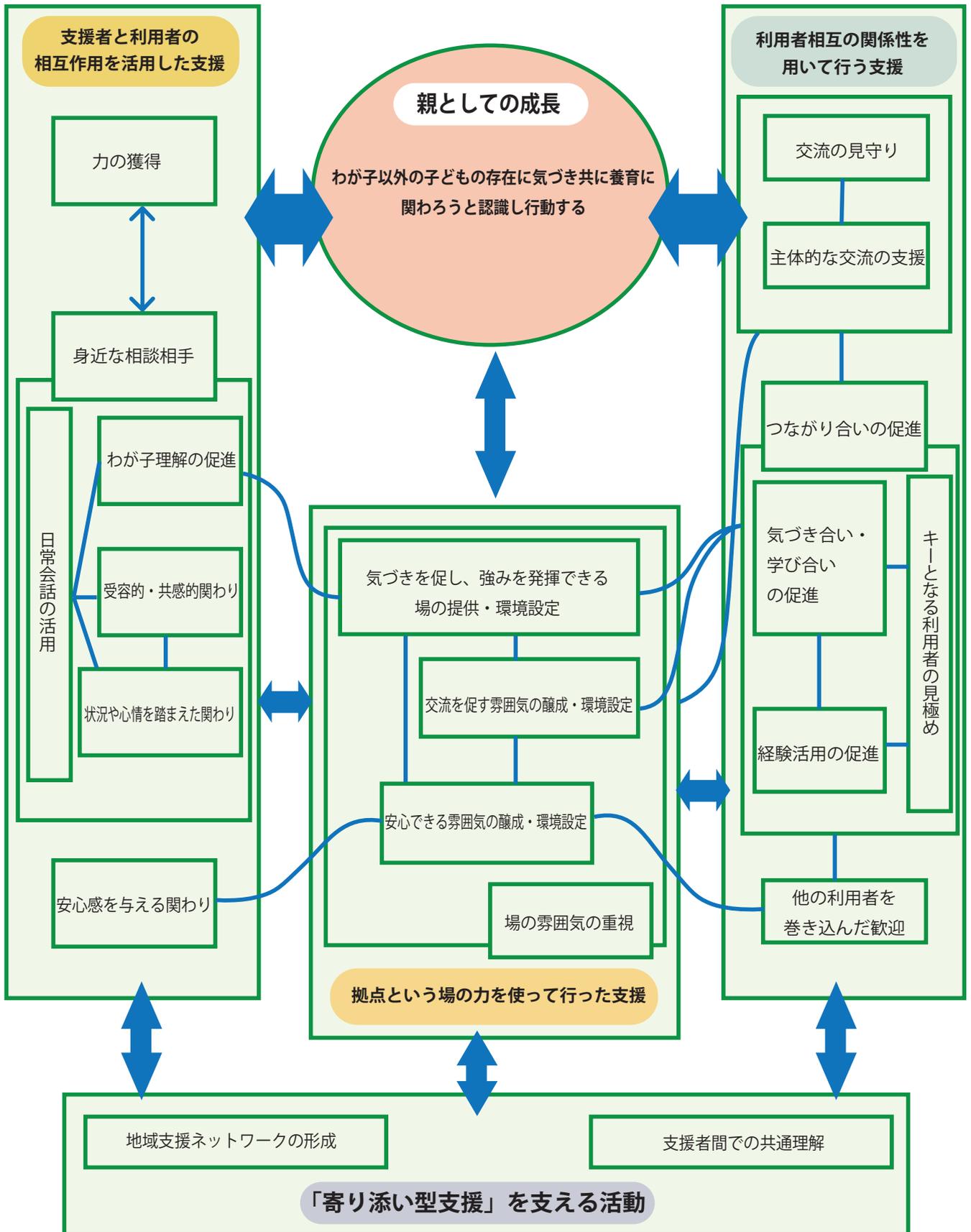
利用者相互の関係性を用いて行う支援

その他の支援（寄り添い型支援を支える活動）

以上の4つの支援で構成されており、

利用者の「親としての成長」を右図のような構造と展開で促しています。

「寄り添い型支援」の構造と展開



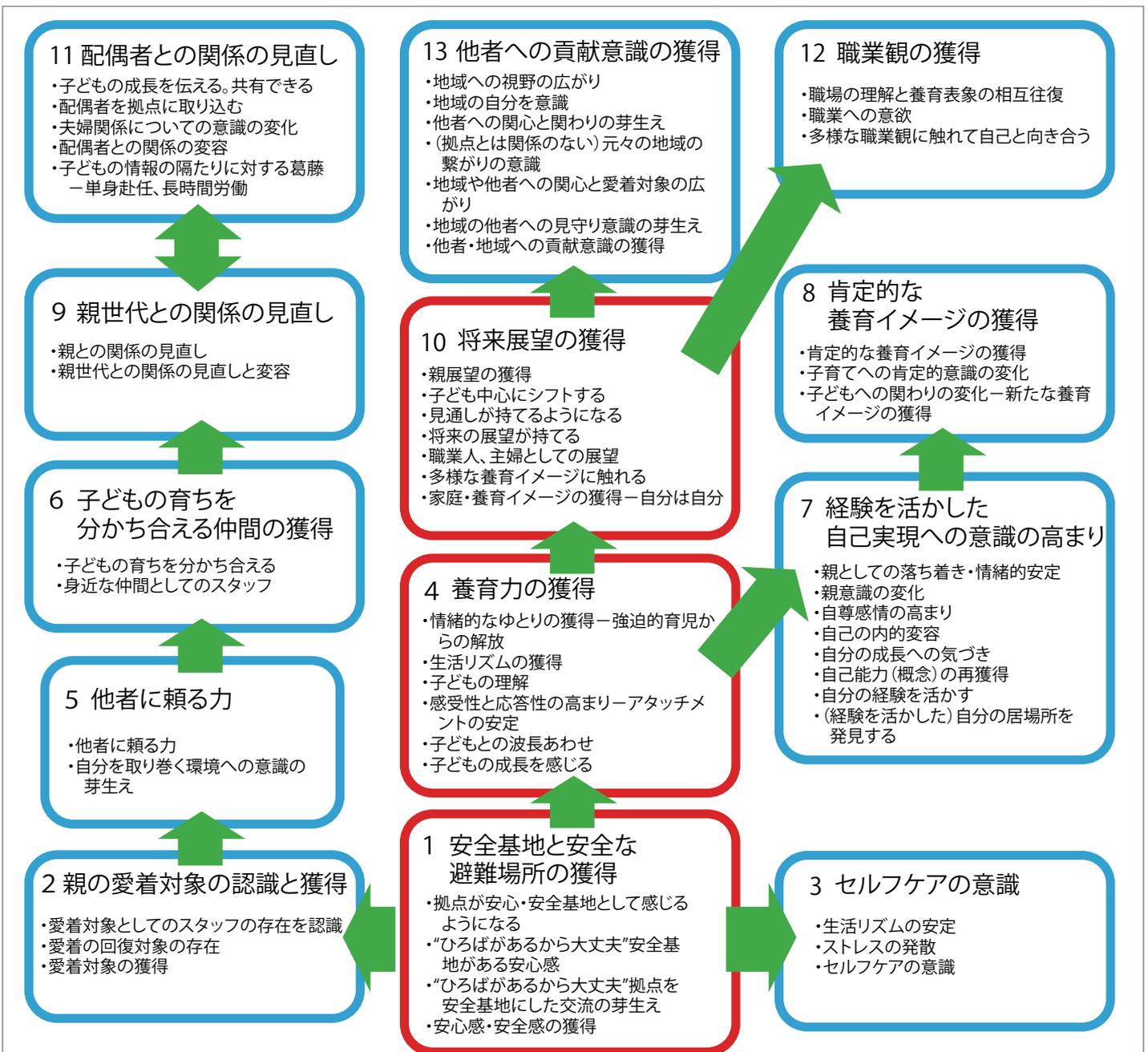
作成：鶴 宏史

利用者（親）への聞き取り調査から

地域子育て支援拠点の利用者の「親としての成長」は、13のカテゴリー（図を参照）に分類できました。

拠点利用がもたらす「親としての成長」は、利用する地域子育て支援拠点を「安全基地・安全な避難場所」と感じることから始まり、支援者や他の利用者に受け入れられる体験によって、親や夫以外の「愛着対象の獲得」につながり、安心な場となった拠点の利用を繰り返すことで「セルフケア」を促し、支援者や他の利用者との交流の活性化によって「養育力の獲得」につながっていく、というプロセスで展開すると考えられます。

「愛着対象の獲得」「安全基地と安全な避難場所の獲得」「頼る力」を実現しているのが「寄り添い型支援」であり、「養育力の獲得」や「将来展望の獲得」と密接に関連しながら「親としての成長」を促進していきます。



「親としての成長」概念図

作成：倉石 哲也

プレ／ポスト調査の結果と分析から

全国の地域子育て支援拠点 5 か所にご協力いただき
拠点を利用し始めて 3 か月未満の利用者 45 名を対象に、
3 か月間の利用で保護者の皆さんにどのような変化があるか、
質問紙によるプレ／ポスト調査と聞き取り調査を実施しました。
併せてご協力拠点の支援者にも質問紙調査と聞き取り調査を行った結果、
次のことがわかりました。

初期利用者の「親としての成長」について

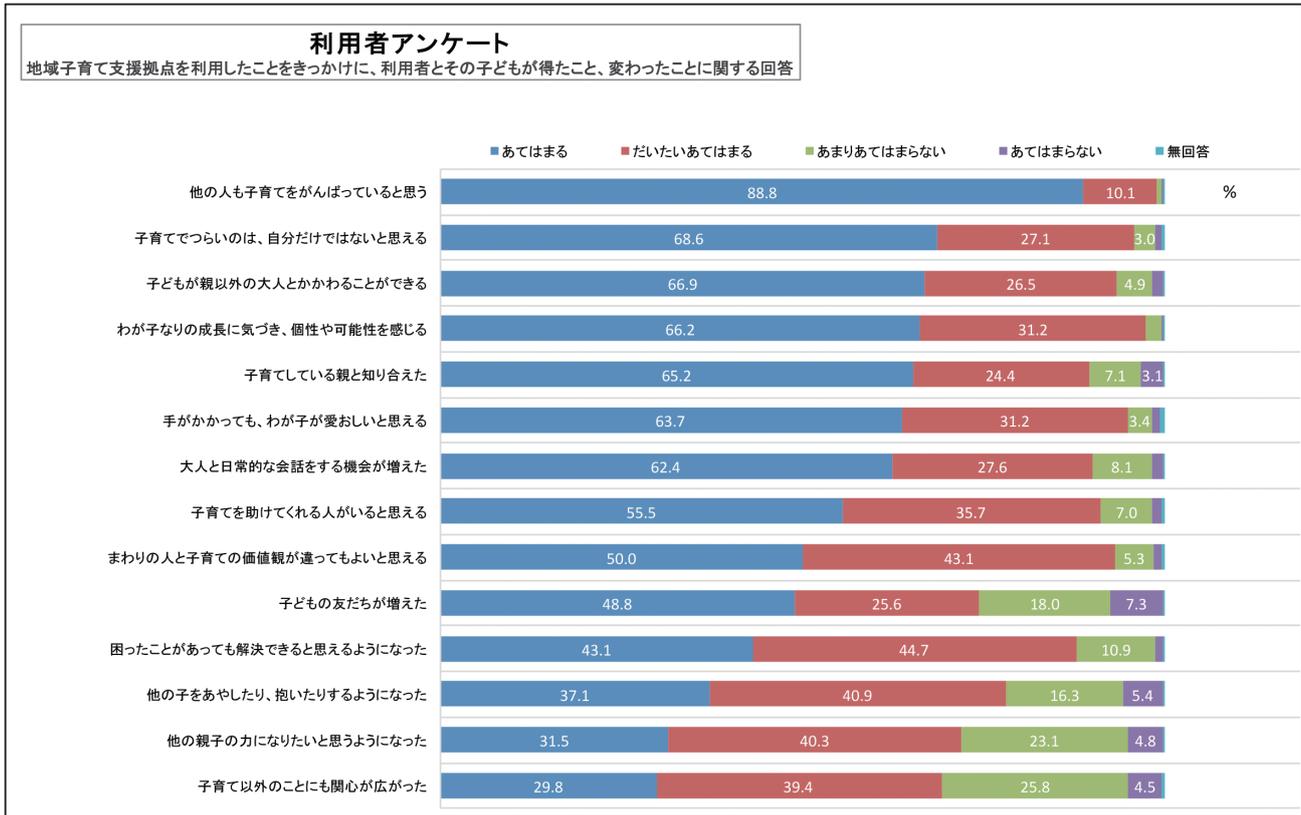
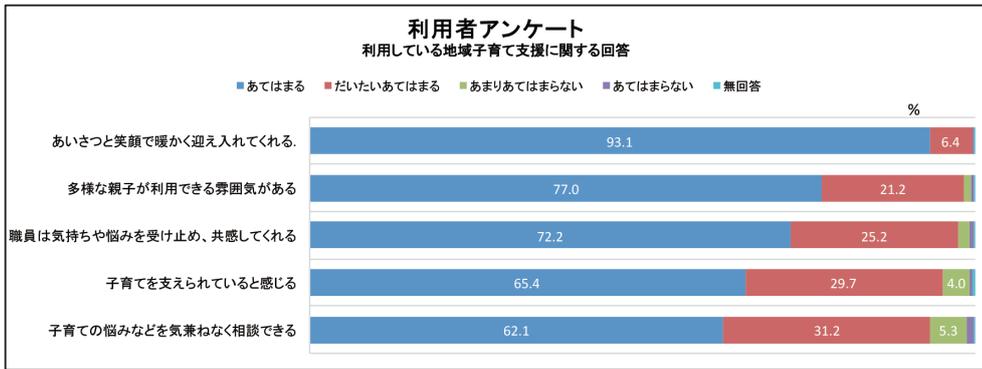
- ・ 全体調査と概ね同様の結果が得られ、拠点に対する利用者の評価は全体的に高い。
- ・ 利用頻度により親としての成長の側面に特徴がある。
- ・ 利用頻度が高い利用者は、親としての成長の 3 つの側面のうち、「自己有用・有能感」が、より高まっていた。
- ・ 利用 6 か月程度の初期利用者についても親の成長が見られたが、利用者同士の交流の深まりや子どもの育ちを分かち合える仲間の獲得などは、一定の時間の累積の必要性が推察された。

利用者の「寄り添い型支援」に対する認識と「親としての成長」との関連について

寄り添い型支援を受けていると意識している利用者の方が、親としての自らの成長を明確に意識できているという可能性が導きだされ、支援者は親子の現状を見極め、親の成長のプロセスに応じて必要な支援や環境を整えている様子が把握されました。



質問紙調査（アンケート調査）結果の一部を紹介します。



調査概要

調査研究事業名

地域子育て支援拠点の寄り添い型支援が親の成長を促すプロセス分析と支援者の役割に関する調査研究

調査目的

地域子育て支援拠点事業は、親子の身近な施設として、子育て支援の中核的機能を果たす取組として重要性が増し、役割の充実に大きな期待がかけられています。

本調査では、地域子育て支援拠点において、特徴的に展開されている「寄り添い型支援」が、親の不安感や負担感、孤立感をどのように軽減するのか、子育て中の親が本来持っている強み（力）をどのように育み「親としての成長」をどのように促しているのかを明らかにし、地域子育て支援拠点事業の支援の質の向上に資する知見を得ることを目的に実施しました。

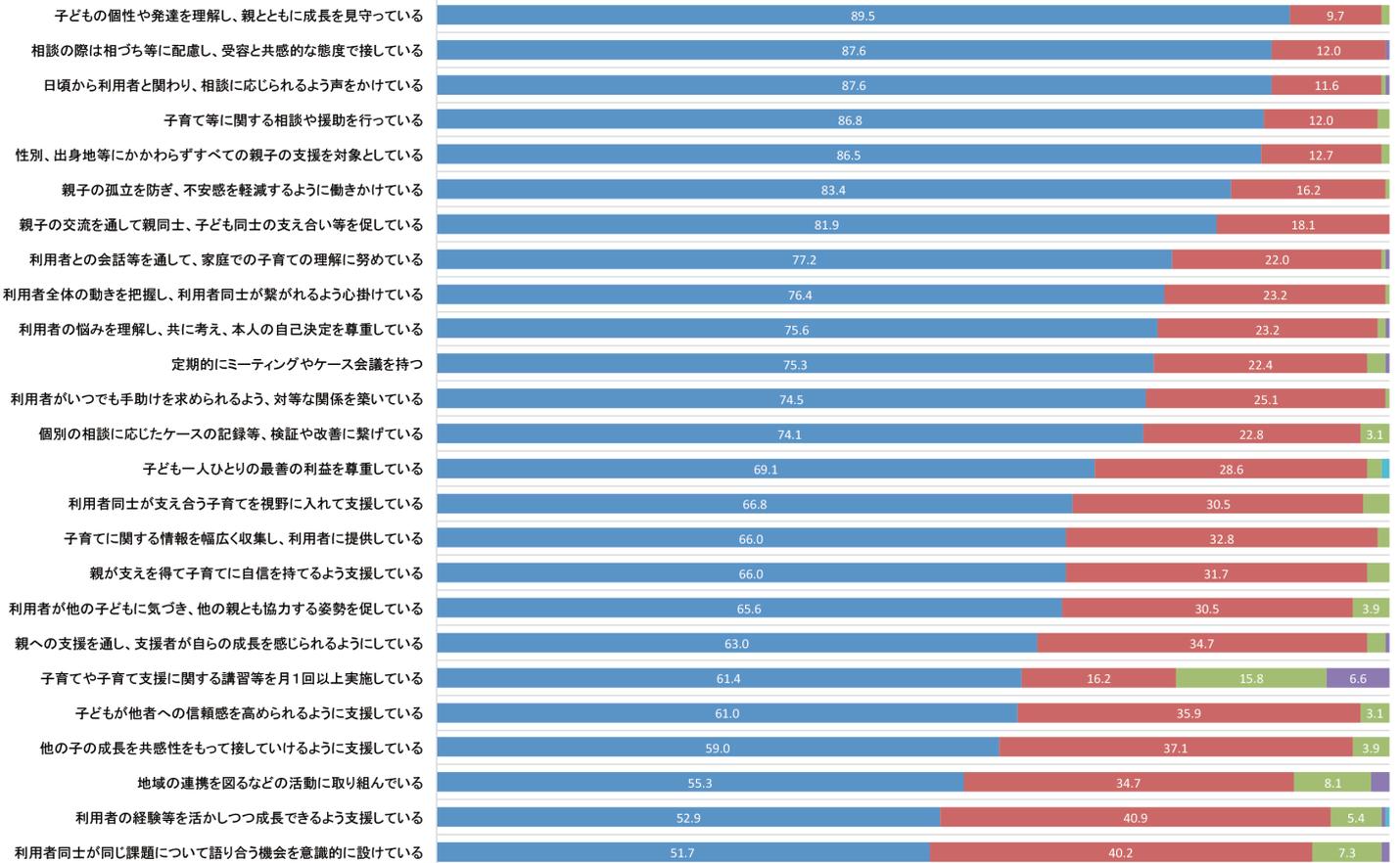
調査対象

全国の地域子育て支援拠点事業 504 カ所 ※1 の支援者（職員）1～2名とその利用者（親）10～20名を対象としました。なお、質問紙調査において郵送調査の対象とした拠点は 53 カ所、インターネット調査の対象とした拠点は 451 カ所でした。聞き取り調査とプレ／ポスト調査は、郵送調査の対象とした 53 カ所から協力を得られた 25 カ所で行いました。

支援者アンケート 地域子育て支援拠点での日々の支援に関する回答

■あてはまる ■だいたいあてはまる ■あまりあてはまらない ■あてはまらない ■無回答

%



回収結果

①質問紙調査

支援者 259 票
(インターネット調査 185、郵送調査 74)
利用者 1,322 票
(インターネット調査 691、郵送調査 631)

②聞き取り調査

支援者：20 人
利用者：20 人

③プレ／ポスト調査

質問紙調査 支援者：5 票 利用者：45 票
(うち有効回答41票)
聞き取り調査 支援者：5 人 利用者：4 人

調査期間

①質問紙調査 平成 30 年 10 月 1 日～31 日
②聞き取り調査 平成 30 年 10 月 5 日～30 日
③プレ／ポスト調査
質問紙調査 1 回目：平成 30 年 10 月 1 日～13 日
2 回目：平成 31 年 1 月 4 日～19 日
聞き取り調査 平成 31 年 1 月 20 日～31 日

※1：調査対象の 504 カ所は、平成 29 年度子ども・子育て支援推進調査研究事業「地域子育て支援拠点の質的向上と発展に資する実践と多機能化に関する調査研究」において、全国の地域子育て支援拠点 6,446 カ所の中からランダム抽出した調査対象 1,210 カ所のうち、有効回答を寄せた 548 カ所の中から、基本 4 事業の質的向上に「取り組んでいる」または「積極的に取り組んでいる」と回答した拠点。

平成 30 年度子ども・子育て支援推進調査研究事業

地域子育て支援拠点の
寄り添い型支援が親の成長を促すプロセス分析と
支援者の役割に関する調査研究

■研究メンバー（検討委員）

研究代表者 坂本 純子 NPO 法人子育てひろば全国連絡協議会 副理事長

伊藤 篤	甲南女子大学	教授
倉石 哲也	武庫川女子大学	教授
鶴 宏史	武庫川女子大学	准教授
奥山 千鶴子	NPO 法人子育てひろば全国連絡協議会	理事長
中條 美奈子	NPO 法人子育てひろば全国連絡協議会	理事
岡本 聡子	NPO 法人子育てひろば全国連絡協議会	理事

◆本調査研究の報告書の全体版と概要版をご覧になりたい方は、下記の NPO 法人子育てひろば全国連絡協議会のホームページにて公開しています。印刷物での提供は致しておりませんので、ダウンロードしてご覧ください。

<http://kosodatehiroba.com>

お問合せ先

NPO 法人子育てひろば全国連絡協議会

〒222-0037 横浜市港北区大倉山 1-12-18-303 TEL:045-531-2888 / 045 - 546-9970 FAX:045-512-4971

info@kosodatehiroba.com